

ミャンマーの軍事医学界からみえてくる医療事情

勝田 吉彰

関西福祉大学

筆者は海外在留邦人のメンタルヘルスを研究テーマとし、なかでも今後急速な日系企業の進出増とともに現地邦人社会の急激な変化が想定されるミャンマーには毎年定期的に訪問し定点観測をおこなっている¹⁾。そのなかで、現地医療関係者からの情報収集を試みるうちに、ミャンマーの軍医大学 (Defense Services Medical Academy)²⁾の精神科教授および医局員とつながる機会がたまたまあり、訪問のたびに医学書の寄贈など含めた親交を深めている。2014年2月の訪問時にたまたま、軍医全体が集まる学会の開催時期と重なったため、招待状をいただき参加する機会に恵まれた。この学会での発表演題を中心に、この国の軍医医学界でどのようなテーマに関心をもたれているのか考察するとともに、軍医学関係者の現状を紹介した。

1. ミャンマー軍の医療施設

ミャンマー軍の医療施設は、総合病院・専門病院・軍医大学・病院船・地方拠点から形成されている。総合病院は新首都のネピトーに1,000床、最大都市ヤンゴンに1,000床 (第一軍病院) と500床 (第二軍病院) がある。ヤンゴンの第一軍病院には、精神科病床100床も含まれる。これとは別に、小児科・産婦人科専門病院300床がヤンゴンにある。

軍医大学は、DSMA (Defense Services Medical Academy) がヤンゴン北郊ミンガラドンの軍事区域内にある。

さらにミャンマー軍は、日本の自衛隊も所有していない病院船を所有している (Hospital Ship UMS Shwe Pu Zun)。これは旧型の小型軍艦を改造したもので、病院船として川を辿り内陸部まで入り込み医療を展開している (Myanmar Army Medical Corps フェースブック)。

これらの主要拠点以外に、全貌は不明ながら、地方拠点が存在する模様で、たとえば精神科の講師のひとりには、ピンウーリン (Pyin Oo Lwin) で射撃チームのメンタルサポートをおこなった経験を語ってくれた。

2. Myanmar Military Medical Conference

2011年まで軍事政権が治めていたこの国では、さまざまな分野で軍に優秀な人材が集中してきた。医療分野でも、日本の防衛医大に相当するDSMAは威容を誇り、その入学生は1週間にわたり学科・体力・心理・リーダーシップにいたるまで徹底的にセレクションを受けた最も優秀な人材を集めており³⁾、同国の医学をリードしている (国全体でも医師養成機関はDSMAを含めて4校しかない)。この人材が全国から集まり毎年開催されるのが Myanmar Military Medical Conference であり、今年で第21回目を数える。

前述の小児・産婦人科専門病院の講堂にておこなわれ、参加者はおよそ300名であった (図1)。軍の厳しいヒエラルヒーを反映し、フロアの椅子は階級により3種類 (チーク材の応接椅子⇒通常の応接椅子⇒プラスチック椅子)、昼食会場も2種類用意され階級により峻別、フロアからの質疑も上位階級者のみが発言しているという環境で進行した。抄録集にも各演者や座長の階級 (Junior⇒Captain⇒Major Captain⇒Lt. Colの順に昇級してゆく) が明示されている。

シンポジウムの演題を図2に、科学講演の演題を図3、一般演題を図4に示す。シンポジウムは災害看護・泌尿器科・産婦人科・内分泌・感染症・医療倫理・放射線・循環器・メンタルヘルス・移植・悪性腫瘍の各分野からほぼ均等に企画されている。科学講演は耳鼻科・眼科・医学教育・臨床検査・公衆衛生・歯科・整形外科・腎臓内科・消化器・内分泌・感染症・薬理学・生理学・生化学からテーマが取り上げられていた。一般演題を図3に示す。薬理学・生理学・生化学の基礎医学系が多いのが目立った。反面、軍医学でまず連想されそうな整形外科や感染症の演題数は筆者が予想したほどには多数を占めているわけではなかった。

連絡先: 勝田 吉彰

〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3

関西福祉大学

TEL: 090-6848-8128 FAX: 0791-46-2526

E-mail: katsuda@tkk.att.ne.jp



図1 参加者はすべて制服着用

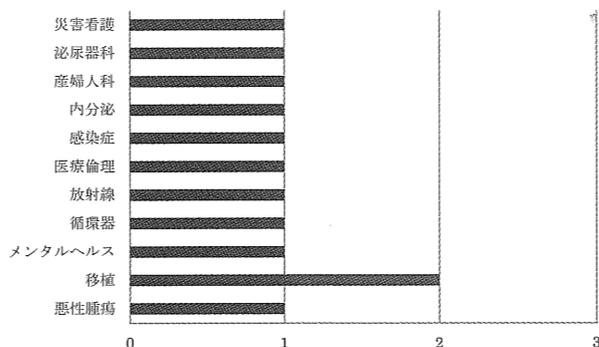


図2 シンポジウムのテーマ

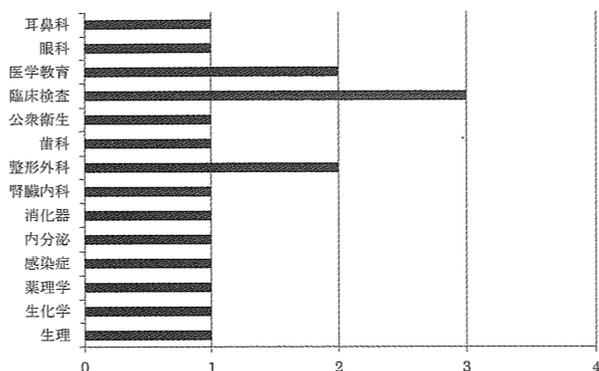


図3 科学講演の分野

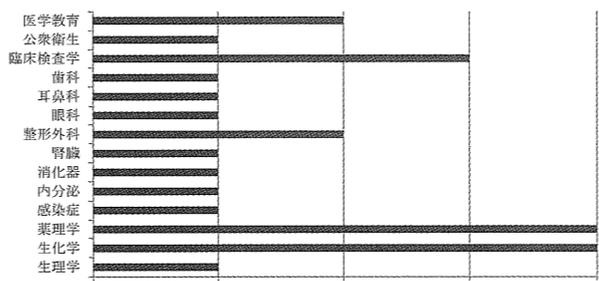


図4 一般演題の分野

表 渡航医学関連の演題

1. Clinical study on efficacy and safety of Artesunate-Mefloquine in uncomplicated falciparum malaria in adults in Bamaw.
北部カチン州, 中国国境地帯のパモーにおける熱帯熱マラリアに対するアーテスネートメフロキン合剤の効果評価. 有効率 100%で副作用みられずとの報告.
2. Knowledge, attitude and practice on preventive measure for malaria among military personnel in malaria risk areas.
ミャンマー軍人のマラリア予防意識調査.
3. Health seeking behaviors among the river nomads along the Ayeyareaddy River, Upper Myanmar Region.
ミャンマー北部, 川沿いの船上生活者の受療行動調査. 過半数の 59.3%がマラリア陽性であった. 医療施設受診は, 通常, 重症化したときのみであり, 軽症では自家製薬か売薬の服用にとどまり受診しないことが多い. 50.3%が船上で出産していた. 啓発教育が必要.

渡航医学関連の演題は3題あり, 表に示す. 渡航医学分野でミャンマーと聞けば“薬剤耐性マラリア”を連想する方も多いと思われるが, 実際に関心は高い模様で Artesunate-Mefloquine 合剤の有効性を再評価する報告があった(有効とする結論). また, 河川を移動する船上生活者の受療行動調査から, 過半数がマラリア陽性ながら, その多くが重症化するまで医療にアクセスしないことが報告されている.

これら演題の種類から考えられるのは, われわれ日本人の感覚から考える軍医のイメージよりも広範囲に万遍

なく研究が行われているということである. この国に医学部がヤンゴン1, ヤンゴン2, マングレーと DSMA の4校しかなく(すなわち医師養成の1/4を占め), 1週間かけて厳選された最優秀な人材を集めた結果, この国の医学全体を牽引する役回りも期待されているといえよう. ここからは, 単に「兵士のための医者」ととどまらず, 基礎医学まで含めた研究を幅広くおこなっていることも納得がゆく.

会場には展示コーナーが設けられ, 製薬会社や医療機器会社がブースを出展し売り込みに余念がない光景は,

先進国の学会と一見なら変わらないが、これらの会社の食い込み方は印象に残るものであった。昼食や間食がバケツから無造作に盛られる“軍隊メシ”であるのに対し、夕食懇親会は、ミャンマー庶民には手の届かない超一流ホテルのガーデン貸し切りでプロの楽団も入れて豪勢に行われ、その費用が業者から出ていることを知人医師が教えてくれた。この宴の途中で福引があり、同じテーブル8人中、筆者を含めた3人、すなわち半数弱が当たりくじを引き当て、同様の手提げ袋をもらった。ホテルに戻り中身を開けると、驚くことにタブレット端末(!)やUBSメモリーなど、医師の月給分を上回る品物がある会社の名を記したキーホルダーとともに出てきた。日本のような景品表示法や公正取引委員会などおそらくは整備されていないであろう環境下、やりたい放題なことが行われているのが垣間みえた。

3. 在留邦人を含めた外国人医療への可能性

前述の、軍の医療施設は軍関係者および家族専用で、自衛隊中央病院のような一般診療は行われていない。しかし、軍の上級医師たちは、アルバイトの形で富裕層や

外国人向け医療機関で診療をおこなっている。たとえば精神科の教授は、Wytoria (Victoria) General Hospitalにて週3回各半日の診療をおこない、毎回10~20人の診察をおこなっている。その受診者には英国人・米国人・中国人のアルコール依存症や気分障害患者が含まれている。また、学会中に名刺交換した元教授の肩書は、やはり富裕層・外国人向け医療機関として歴史の長いPunHlaing病院のものであった。したがって、近い将来、在留邦人数が増えてゆくなかで、現地の邦人の医療が優秀なる軍の人材(もちろん、その診察時には軍服を脱ぎ一見して分からないわけであるが)によって担われる場面も増えてゆくと思われる。この国の軍医学界の一層の発展を願うものである。

文 献

- 1) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国における在留邦人メンタル事情. 臨床精神医学 2013; 42: 389-392.
- 2) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国の精神科医療事情. こころと文化 2014; 13: 54-60.